

主の御名を賛美いたします。

9. 11の今日、一人でも多くの方がキリストの真の平和にあずかることができますように、またそのために、主が私たちクリスチャンを「平和の道具」として用いてくださいますよう、心から祈ります。

8月13日～9月4日に渡ったブラジルでのコンサート・ツアーを、主の大きな導きの恵みのうちに終えることが出来ました。その後、2日ばかりで、6日、台風とともに日本上陸、欠航一便前の飛行機で、成田から最終地、伊丹空港に到着することが出来ました。今回は、長いレポートになりましたが、ブラジル伝道コンサート報告書をお送りさせていただきます。

まだまだ残暑が残る日本ですが、皆様のご健康が守られますように。

主の恵みと御愛が、皆様と共にありますように！

主にあつて

工藤篤子

ブラジル・伝道コンサートツアー・レポート(工藤篤子メールマガジン111号)

はじめに

8月13日～9月4日、3週間に亘るブラジル・コンサート・ツアーは、最初に軽い風邪をひいたほかは、健康も守られ、主がひとつひとつのコンサートを力強く導き祝していただきました。コンサート・ツアー中、皆様の背後のお祈りをひしひしと感じました。ほんとうにありがとうございました！また、ブラジルでは、一年前から篤い祈りとともにたくさんの準備をしてくださった「ブラジル工藤篤子コンサート実行委員会」の皆様を始め、ピアニストの宮島紀子さん、日系人教会の兄弟姉妹、特にオーガナイズ責任者であるオザスコ・ホーリネス教会の佐藤浩之先生には、終始、多大なご配慮と御尽力をいただきました。この場をお借りして、心よりお礼申し上げます。

どうぞ、ブラジルで蒔かれた福音の種が、多くのみなさんの心の中で芽を出し、主が成長させてくださいますよう、引き続きお祈りください。以下、ブラジル旅行日記をまとめたものを、お送りさせていただきますので、お読みください。

8月15日

13日夜、無事、サン・パウロに到着。14日の朝には、AKMMスタッフの中川庸子さんも日本から無事到着。

昨日、午後から、新聞社を2件(日系新聞、サンパウロ新聞)を回ってインタビューを受けた。その後、ピアニスト(宮島みち子さん)と音合わせ。夜、実行委員会の13名の皆さんとともに、日本食レストランで夕食会に招待していただいた。レス



トランでは、いにしへの歌や演歌が流れていて、30年前の日本に戻ったような気がした。

パイパイが美味しい！

サン・パウロは、東京とほぼ同じ人口をかかえた、高層ビルの建ち並ぶ大都会。日系人は、サン・パウロだけで60万人、ブラジル全体では150万人。ここでは、日本のものはほぼ問題なく手に入る。

私たちが宿泊するニッケイ・ホテルは、日本人の店が立ち並びリベルダージ地区、別名『東洋人街』(前は、『日本人街』と呼ばれていたが、最近では、韓国人、中国人が多くなってきた)は、入口に、真っ赤な鳥居があり、街路には、提灯の形をした街灯が並んでいる。



ここを通る日本人は、どうみても日本人らしからぬ日本人ばかり、つまり、私のような日本人ばかりなので、心地よい安堵感を覚える。都心の高層街以外は、私が留学した頃のスペインと、ルーマニアの中間ぐらいの感じだが、悲壮感のようなものは全く感じられず、ゆったりとした明るさがある。

1500年代にポルトガル人が入植した時、普通のポルトガル人はなかなかブラジルに行きたがらなかった。そこでポルトガル政府は、監獄に入っていた囚人たちを、「ブラジルへ行き、まじめに働き、現地人をめとって家庭を築き、繁栄せよ」と、ブラジルに行かせた。ポルトガル人は、スペイン人よりはるかに温厚な人種なので、現地の人とうまく混じり合っていた。従って、スペインが侵略した他の中南米諸国のような人種差別はほとんど見られず、白人、アフリカ人、インディオ、アジア人、混血が平和に共存している。

明後日からいよいよコンサート開始。



8月17日(金)オザスコ・コンサート

ブラジル第一回目の、オザスコでのコンサート無事終了。

ガブリエラさんの司会、ミヤコさんの通訳、ジョージ君のPPT奉仕、バッチリ。佐藤先生も、アルード先生も、教会の皆さんも、みなとてもよく奉仕してくださった。とにかく、こちらは、みんな明るく、ナチュラルな人たちばかり。

しかし日本とも欧州ともまったく違った雰囲気の中、第一回目のコンサートだったこともあって、個人的には多少とまどいを感じるものがあった。でも、今日のコンサートをたたき台に、次回につなげてゆきたいと思っている。

ところで、リハーサルのマイクテストではひどい音響で、PAの方にどのようにお願いしても、ほとんど良くならなかった。機材が悪いせいとあきらめたが、コンサートの前に、主に、「機材に働きかけて、良い状態で響くようにして下さい」と祈ったら、本番では嘘のように響きが良くなっていた。これには奉仕者一同、とても驚いた。主に心から感謝を捧げます。

CDは、サントアンドレの鈴木マキ先生が最善を尽くしてくださったが、今日のコンサートに間に合わなかった。もう週末だから、明後日の日曜のコンサートにも間に合わないだろう。ブラジルCD制作に関してはかなりの高額を投資しているのに、一瞬心が動揺したが、祈りの中で「朽ちるものにしがみつけない。あなたは人々に朽ちないものを宣べ伝えなさい。」という主の語りかけを聞き、平安を得て心からの賛美を捧げることができた。

コンサート後に回収した180枚のアンケートのうち、89名の方が「キリスト教をもっと知りたい」、39名の方が「牧師に訪問して欲しい」の欄に印を付けたそうだ。「これほど多くの人々がキリスト教に心を開いてくれたことはかつてなかった。」と、コンサート実行委員会の方もとても喜んでくださった。

●オザスコについて

オザスコは、イタリアのピエ・モンテのオザスコ市のアントニオ氏がここに町を建てたことから、オザスコと名付けられた。ピエ・モンテは、福音派のヴァルドー派がコミュニティーを形成した町。もしかすると、アントニオ氏もヴァルドー派の末裔だったかもしれない。だとすると、ヴァルドー派は、ブラジルまで流れてきたことになる。

●ブラジル日系人と日系人教会

こちらの日系人の20代、30代の多くは3世である。彼らの多くは日本語が話せない。これは、第二次世界大戦時から戦後にかけて、ブラジルが日系人に日本語を話すことを禁じたことによる。2世(40代～60代)のほとんどは両国語を話す。彼らは、日本人気質を頑固に守る1世と、ブラジル人化した3世の良きパイプ役を果たしている。そのため、多くの日系人教会は、バイリンガルで礼拝をしている。

明朝18日、1ヶ月前に大事故のあったサン・パウロのコンゴニャス空港からクリチーバに向かう予定。

8月19日(日)クリチーバ・コンサート

ブラジルでの二回目のコンサート(クリチーバ)が無事終了。大きな御霊の導きに包まれた、特別なコンサートであった。(写真: 湯浅牧師ご夫妻、着物を着た教会の若い姉妹、マリア姉妹会の3人の姉妹、メシアニック・ジューの兄弟姉妹と)

クリチーバはパラナ州の首都で、人口2百万の都市。宿泊先のホテル・ブリストルの12階の部屋からは、町の高層ビルが一望出来る。ここは、日産ルノー、ボルボがあることから、ブラジルで最も高度成長をしている町。



コンサートには、600人ほどの人が集まり、会場は一杯になった。市長秘書、州議会議員、日本人会会長などの要職に就いている方々がたくさん来られ、それらの方々がコンサートの前に祝辞を述べられた。そのうちのひとりの方が、「私は、歌手 Atsuko Kudo の証しを読んで、大きな感銘に包まれています」と言われた。プログラムに証しのトラクトをはさんだことは、大きな効果があった。トラクトを作成してくださったコンサート実行委員会の皆さんに心から感謝します！

私は、この日、通訳を入れないで、スペイン語—日本語のバイリンガルで証しをした。日本語だけ話すよりも、もっと大きな主の導きを感じながら話すことが出来た。しかし、これはみ霊の御力以外の何ものでもないと思った。次回も同じように、スペイン語と日本語のバイリンガルで出来るか、と問われると、やはり、御霊の御力でないと絶対無理だと思う。

PA は、マイクにリバーブが入らない単純な装置しかなかったが、それがかえて証しと歌をひとつのメッセージとしてくれたようだ。「荒城の月」では、しゃくり上げて泣く方もあり、「ビア・ドロローサ」では、あちこちですすり泣きの声が聞こえてきた。「セルトンの月明かり」、「ふるさと」、「アメイジング・グレイス」などは、皆さん、大きな声で唱和してくださった。

私は、こちらの冬と夏が一緒になった気候についてゆけず、3日前に軽い風邪を引いてしまったが、声も守られ、心からの賛美を捧げることができた。

コンサート後、マリア福音姉妹会クリチーバ支部の姉妹たちと、メシアニック・ジューの兄弟姉妹が何人か挨拶に来て下さった。私が、「明日に架ける橋」を歌った時に、作曲者ポール・サイモンがユダヤ人であることから、ユダヤ人が神に特別に選ばれた民であることを言及したのだが、それが、彼らには、とても嬉しかったようである。

「クリチーバ福音ホーリネス教会」

コンサートを企画してくださったクリチーバ福音ホーリネス教会は、教会員300名を有する、パラナ州で一番大きな日系人教会である。礼拝は2部に別れ、一部は日本語礼拝、2部がポルトガル語の礼拝を行っている。一部は40~50名ほど集まり、そのほとんどが高齢者の方々だった。2部では、若者を中心とした250名ほどの人々が集まり、賛美も、PPT を用いながら、ギター・キーボード、ドラム、ヴォーカルによる賛美チームが賛美を導いた。

この教会の湯浅敬主任牧師のお父様は、1929年に日本ホーリネス教団から遣わされ湯浅十郎宣教師。1925年に最初に教団から遣わされた物部尠夫師と共に労苦し、1930年に物部師が召された後は、湯浅十郎師がその働きを引き継ぎ、ブラジル福音宣教に大いに奮闘した。湯浅家からは、その後、次々と宣教師、牧師が輩出、敬師は、スイスの大学で学んだ後、ブラジル、メキシコ、ペルーで宣教活動を続けてこられた。お会いした瞬間に、「大きな器」という印象を受けたが、果たしてその通り、すべての面で実にスケールの大きな方だった。

ところで、コンサートで祝辞を述べられた2人の州議会議員は日系人だった。クリチーバの前市長も日系人。今、ブラジルでは、医者、大学教授などの知識人に、多くの日系人がみられる。それらの優秀な日系人の多くは2世、3世の方々で、家が裕福でなかったため、昼働き、夜学校へ行きながら、努力を重ねて出世した。やはり、とてもスケールの大きな、かつ謙遜な、日本ではなかなかお目にかかることのできないタイプの人格者ばかりだった。

8月20日(月)マリア福音姉妹会訪問

今日は、マリア姉妹会を訪問。シスター・アドラ、シスター・ネハマと、パラグアイの支部からDVD作成のためにクリチーバに来ていたシスター・アガペと幸いなひとときを持たせていただいた。「イエスの御苦しみの園」を散策しながら、今一度、私の罪のために、どんなに主が苦しまなければならなかったかをかみしめ、胸が熱くなった。

(Via Dolorosa は、主が御自身から望まれた道だった。それはあなたへの愛のため、そして私への愛のため)



8月22日(水)イペランジャーの老人ホーム



サン・パウロから120kmのところにある、イペランジャーという老人ホームで歌った。

イペランジャーは、ブラジルの国花であるイペーの花が咲く地という意味。

ここの老人ホームは、養鶏場をしていた日系人が土地を寄付して建てられた。その家族の方も来られていた。成功した日系人の多くは、このように、たくさんの慈善事業をしている。日系人のためだけでなく、貧しいブラジル人をも大いに助けている。

老人ホームに入っている30人の日系人(ほとんどが一世)の中に、キムさんという韓国人がいらした。「君は愛されるため生まれた」を韓国語で歌ったら、とても喜んでくださった。日系人のほとんどは一世の方々に、皆、言葉に尽くせないほどの苦勞をしてこられた。その方々の姿を見たら、皆さんが泣く前に、私の方が涙ぐんでしまった。

8月24日(金)サンジョゼ・コンサート

サン・ジョゼ市のコンサート終了。

とても祝されたコンサートだった。皆さんのお祈りのお支えに心から感謝！(写真:通訳者の山上先生、実に素晴らしい通訳でした！)

サンジョゼ市は、サン・パウロから東に100キロのところにある、人口60万の都市。ここには約2000世帯の日系人が住んでいる。南米で一番の航空大学があり、ブラジルの飛行機会社、石油精製会社などがある、文化的で、豊かな町である。ブラジルは、どこの町もたくさん



の高層ビルが建ち並び、その景観は圧巻である。

今回は、サン・ジョゼのホーリネス教会とサン・ジョゼ市役所、スポーツ振興会が協賛して、コンサートを企画して下さった。

ところで、コンサートのリハーサルで、会場の下の階にあるラジオ局の人が入ってきた。「お手洗いにいったら聞こえてきた声に引き寄せられて会場まで上がって来てしまった」とのこと。急遽、私のCDを流して、夕方5時のニュースでコンサートの宣伝をしてくれた。

本番では、500人の会場がかなり一杯に見えたので、来場者は400人ぐらいあったと思う。しかし、コンサートが始まると、大変なハプニングが起こった。何と、ステージの上のモニターから、ラジオ番組が聞こえてくるではないか！「神様、これは敵の妨害です。どうかこれを消してください。さもなくば、私がこの雑音を全く気にしないで賛美出来るようにしてください。小羊の血潮によって、この場を聖めてください。」と祈りながら、賛美してゆくと、3曲目の「鳥のうた」では全く気にならなくなった。後で分かったのだが、ここは、モニターがラジオの電波をよく拾ってしまうのだそうだ。

今回のコンサートでは、会場の皆さんが、アンコールでブラジル語で歌った「神だけが」を一緒に歌い始めた。あの高いキーを、みんな、私と一緒に歌ったのだ。終わると、みんな総立ちで、「ブラボー、ブラボー！」と叫ぶので、私の方でも、神様と会場の皆さんに、「ブラボー、ブラボー！」と叫んでしまった。

このコンサートにやっとCDが間に合い、75枚売れた。



コンサート後は、TVのインタビューがあったが、インタビューアが、「あなたの神との出会いの話は実に心打つ内容でした。ところで、あなたが神と出会った後、あなたの人生の何が一番変えられましたか？」と聞くので、さらなる証しをすることが出来た。

明日は、サン・パウロに戻り、26日(日)は、午後からサントアンドレでのコンサート予定。



8月26日(日)サントアンドレ・コンサート

サン・パウロの近郊都市、サントアンドレ(人口約100万人)のコンサートを、主の導きのうちに終えることができた。日本人学校の運動会、日本人会の行事などと重なり、来場者は280人ぐらいだったが、多くはノン・クリスチャンの方方で、内20~30名が一世の日系人だった。

会場は素晴らしいコンサートホールで、最高のスタインウェイのピアノが入っていた。

教会の名前を一切出さないコンサートだったが、会の最初に祝辞を述べられ、その後、会場の前列に座られた副市長と市長秘書が、賛美と証しを、終始うなずきながら聞いてくださっていた。そしてコンサートの最後、日系人キリスト教会連盟会長の森ロイナシオ師が、「こんなにキリストの愛があふれたコンサートは聞いたことがありません。皆さんも、きっとキリストの大きな愛を感じ取ってくださったことでしょう。もしこのコンサートを聞いてくださった方の中のひとりでもイエス様を救い主として受け入れてくださるなら、工藤篤子女史のブラジル訪問は実を結んだことになります。」と、間接的に、招きのことばを語られた。このように、主は、このコンサートを最高の伝道の場としてくださった。主に心から感謝を捧げます！（写真：左からピアニストの宮島みち子さん、私、森ロイナシオ師、鈴木マキ師）

「サント andre 福音ホーリネス教会」

この日の朝は、サント andre 福音ホーリネス教会の礼拝に参加させていただいた。この町唯一の日系人教会で、70～80名ほどの日系人が礼拝に集っている。札幌出身の南保(なんぼ)宣教師が開拓された教会で、もう95才になれる南保先生と息子さん、娘さんご夫婦、そのご家族もいらしていた。

●「勝ち組」対「負け組(認識派)」

サント andre は、「勝ち組」(敗戦を信じないで、「日本は勝った」と信じていた人々。当時、勝ち組のテロ団が、「負け組」の人々を殺戮するという惨事が起こった。多くの牧師は、日本の敗戦を明確に宣言したので、その多くが勝ち組テロ団の標的になった)が多く集まった町だそう。この「勝ち組」「負け組」の争いの影は、今なお、日系人の間に長く尾を引いている。

●日本語禁止令

港町に多く住んでいた日系人は、戦時中迫害されて、奥へ奥へと追いやられた。日本語学校は焼かれ、日本語を話すことを禁じられた。ポルトガル語を話せない1世が日本語を話すと、逮捕された。日本人へのいじめは、1962年頃まで続いた。しかし、1962年頃から、日本からたくさんのトランジスタが入ってくるようになると、次第に日本人が尊敬されるようになり、いじめも消えていった。そのため、2世の多くは日本語は話せるが、ブラジル語なまりのアクセントで、読み書きはあまり出来ないそう。3世、4世になると、ブラジル語オンリーで、日本語が通じない人の方が多い。

28日は、サントスの厚生ホームにてコンサート予定。

サントスは、1907年に加笠戸丸に乗って、最初の日本移民 791 名が上陸した町。

●ブラジル見聞録

- ブラジルの石油自給率は100%。
- ブラジルの経済の60%をサン・パウロが握っている。
- ブラジルは、95%の鉄分を含んだ鉱山がたくさんある。
- コーヒーはアフリカから入ってきた。今、ブラジルのコーヒー栽培は、ひとところから比べると、かなり縮小された。
- ブラジルのコーヒーは濃いがとてもマイルドで、最高においしい！
- ブラジルは、くだものが豊富で実に美味である。見たことのないくだものがたくさんある。

- 1888年にアフリカ人奴隷が解放された20年後の1907年、日本人移民がやってきた。日本人移民は、アフリカ人奴隷が住んでいた小屋に住まわされた。最初は綿、さとうきび、その後、コーヒーの時代がやってきた。
- 日系2世、3世は、一生懸命勉強した。未だブラジルの医学部のトップ3割、航空大学のトップ2割はいつも日系人だそうである。30～40年前の学校のトイレには、「お前達がトイレに入っている間も、日系人は3倍勉強している」という落書きまであったほどだそうである。そのため、ブラジルの多くの医者、学者・弁護士は日系人。
- ブラジルの北にはオランダ人、南には、イタリア人、フランス人、ドイツ人が入植した。南に行くと、未だ、ドイツ語しか話さないコロニーがある。ドイツからは、主にケルンから牧畜業者が入植した。イタリア、フランスからの入植者は、ぶどうを栽培し、ワインを作った。
- 北のオランダ人入植地には、たくさんのユダヤ人がやってきた。オランダ領は外国人に寛容であったからである。数年前に、ユダヤ人移民100年祭が行われた。しかし、最初にユダヤ人がブラジルにやってきたのは、1500年頃。1492年のスペインのレコンキスタでスペインを追い出されたユダヤ人の多くは、ポルトガルに逃れた。しかし、ポルトガルがスペインのカトリック勢力の影響を受けるようになると、ユダヤ人はここにもいられなくなった。その頃、ポルトガル人がブラジルに漂流し、ポルトガル領を宣言したため、ユダヤ人たちは、ブラジルに逃れてくるようになった。しかし、そのユダヤ人の多くは、ブラジル人たちと混じり合ってしまったので、今では、ユダヤ人の血を引いていることを知らないユダヤ人がたくさんいる。しかし、植物の名字をもつ人の多くは、ユダヤの血を引いていると言われている。
- 南アメリカで、日本人が最初に入植したのは、1899年のペルー。彼らは、主にさとうきびを栽培した。第二次大戦中、この国の日系人が、南アメリカで一番迫害された。
- アルゼンチン・ウルグアイに入植した日本人のほとんどは沖縄県人であった。
- 1908年、笠戸丸に乗ってブラジルに移民した791名の半数は沖縄県人であった。
- 南アメリカに入植した沖縄県人は、他の日本移民とほとんど交わらなかった。日本人も沖縄県人を差別した。その差別問題は、未だ尾を引いている。
- 1960年代、トランジスタはアメリカで発見され、日本人によって大量生産され、韓国人によってブラジルに密輸された。

8月28日(火)サントス厚生ホーム・コンサート

サントス厚生ホームにて、賛美の時を持たせていただいた。この老人ホームには、一世の日系人を中心に、80名の方々が入所していられる。ここにも、韓国人、朝鮮人が3人いらした。今日のコンサートには、コンサート実行委員の方々、ブラジル日系人教会連盟の牧師先生たちが数多く駆けつけてくださった。イペランジャー老人ホームもそうだったが、日本から、シニア・ボランティアの方が奉仕にいらしていた。



●日本移民上陸祈念碑



コンサート後、実行委員、牧師先生たちと共に、海岸沿いに建てられた、日本移民上陸祈念碑を見に行った。1908年(明治41年)6月18日、このサントス港に日本移民791名を乗せた笠戸丸が入港した。

祈念碑には、「この大地に夢を」と書かれてある。人々は、この大地に夢を馳せてやってきたのだ。この20年前に奴隷解放を行って農園の労働力を失ったブラジルは、日本からの労働移民を待っていた。白いスーツとドレスに身を包んで船から降り立った日本人を見たブラジル人は驚いた。しかし、移民を待っていたのは、過酷な労働と、住居として与えられたのは、20年前まで奴隷が住んでいたボロボロの掘立小屋であった。

厚生ホームで1世の老人にお会いした後、3人の親子の銅像を見たときには、さまざまな思いが胸を交差した。1世は、家族をマラリヤで失いながら、歯を食いしばり過酷な労働に耐えた。2世は、親を助けながら勉学に励み、多くの者が出世した。日本人の勤勉さは、ブラジルの賞賛の的になっていった。日系社会は3世、4世の世代に引き継がれ、現在ブラジルで多くの実を結んでいる。

その中で、1925年にブラジルに渡った物部尠夫宣教師を始めとし、日系人への宣教の着実に進んでいった。現在、ブラジルの日系福音派教会数は約110、そのうちの約40がサン・パウロ州にある。

8月31日(金)アリアンサ弓場劇場・コンサート

1933年、西宮出身の弓場勇さんが、アリアンサに共同体の農場を開墾した。彼のモットーは、芸術・信仰・労働。弓場さんは、人間キリストにあこがれ、キリストの人格を目指した。現在、70名弱の人々が、弓場農場で共同生活をしながら働いている。

8月30日、弓場農場到着日、弓場バレエ団が、私たち2人だけのために、1時間、ステージで素晴らしい演技を見せてくださった。昼間は農場で働いているおばさん、おじさん、若者、そして子ども達が、さっそうと美しい衣装に着替えて、目を見張るような素晴らしい踊りを披露してくれたのには驚嘆した。(写真:バレエ公演プログラム最初の若者による「よさこいソーラン節」、弓場バレエ団は、ブラジルのよさこいソーランで、毎年一位を獲得している)



宿泊した部屋の外には、実をたくさんつけたパパイヤの木があった。桑の木はおいしそうなお実(ブラジル語でアモーラ)をたくさんつけていたので、取って食べた。



8月31日弓場劇場コンサートの日の朝、メロンほどの大きさのアボガドを、庸子さんと半分ずつ分けて、砂糖とレモンをかけていただいたが、その何と美味だったこと！それから、グアバの、これまたとびきりおいしいジャムを、ここで焼いてくださったトーストにつけて食べた。

昼には、アリアンサ・キリスト教会に昼食に招かれた。別名「伯爵のフルーツ」と呼ばれるアテモヤ、グアバ、ジャウボシチカバ、そしてジャカという胸幅より大きなくだものをいただいた。ピーナツを入れたお赤飯も美味しかった！（写真：巨大フルーツ、ジャカ）

コンサートは夜8時開演だったが、6時頃から、近郊から貸し切りバスでたくさんの人々がやって来た。弓場農場では売店を開設。焼きそば屋、おにぎり屋も出され、来場者は、コンサート前に、ここで腹ごしらえと団欒のひとつき。

8時、いよいよコンサートが開始。

どこに家があるのだろうかと思われる牧草地一帯のアリアンサの弓場牧場の掘立小屋劇場に、430名の人々が集まった。特設の長いすも、全部一杯になった。

弓場農場の人々の芸術レベルは非常に高いものがあり、リクエストに従って、ここではオペラアリアを一曲歌った。ブッチーニ「トスカ」の「歌(芸術)に生き、愛に生き」という、歌手トスカが「私は芸術(歌)に生き、愛に生きてきた。貧しい者に施しをしてきた。教会の聖母マリア像に宝石をちりばめたマントを捧げた。教会では神に賛美を捧げた。なのに、恋人が殺されてしまうとは、神よ、あなたはどのようにこんなにむごいうちを私になさったのですか？」と切々と自分の悲劇を神に訴えるアリアである。それで、私は、「もし、トスカが『芸術に生き、愛に生き』ではなく、100%キリストに生きていたなら、良い行いによるのではなく、キリストの深い愛に触れながら生きていたなら……。けれども、これこそ、イエスキリストの十字架の贖いにあずかる前の私の姿なのです」と言って、このアリアを歌ってから、ヴィア・ドロローサにつないだ。



アリアンサ・キリスト教会の下桑谷先生は、一日一軒訪問伝道を続けて来られた。どこに家があるか判らない牧草地を車で走り、家が見つかり、そこを訪問してキリストを宣べ伝えた。その一日一軒訪問を受けた多くの方々が、知り合いを連れてコンサートに来られた。その数は、弓場劇場の小屋を一杯に満たした。下桑谷先生はすでに70を越えておられるが、この僻地での、地道でかつ精力的な伝道には、頭が下がる思いであった。

9月2日(日)サン・パウロ・コンサート



サン・パウロ市のブラジル最後のコンサートのためのお祈り、心から感謝いたします！

この日の朝、祈っていると、「イエス・キリストご自身とキリストの贖いを明確にお伝えさせてください」という祈願に導かれた。同時に「わたしは聖であるから、あなたがたも聖なる者とならなければならない」というみことばが心に響き、しばらく、悔い改めと「小羊の血潮によって聖めてください」という祈りに導かれた。



本番では主の右手が私の手を取ってくださっているような不思議な臨在感とともに、ステージに立たせていただいた。来場者は約1100名。ほぼ満席。ステージから見ると、会場は人々で真っ黒に見えた。

コンサートの最初から最後まで、主が力強く導いてくださった。最後に、皆が立ち上がって盛大な声援と拍手をしてくださったので、「私は皆さんの拍手を受けるにふさわしい者ではありません。私にはなく、罪人の私のために十字架にかかってくださったイエス様に拍手

を捧げてください」とお願いしたら、皆さん、天に向かって割れるような拍手を捧げてくださいました。

以下、私の耳に聞こえてきた感想。

「自分は仏教徒だが、工藤さんの話すことに深い感銘を受けた。歌もちろんよかったが、もっと話しが聞きたかった。」(私からのコメント:でもコンサートは2時間半にも及んだのです！もっと話してたら、3時間以上になったことでしょう)

「こんなに福音がはっきり語られるコンサートは生まれて初めて聞いた」

「歌手工藤篤子ではなく、キリストの栄光が現されたコンサートであった」

「ドローローサを聞きながら、涙が止まらなかった。十字架を負って歩むべき信仰の原点に引き戻していただいた」(牧師夫人)

「これほどひとことひとことが心にストレートに響く賛美をはじめて聞いた。自分もこれからそのように主を賛美してゆきたい」(牧師)

「私たちが工藤さんに親近感を感じたのは、工藤さんが、私たちのように長年外国に住む日本人だからだと思う。コンサートに来た日系人は、工藤さんと同胞感を感じながらコンサートを聞いていた。また来てください。」...

●ブラジル制作CD「神だけが」

困難を極めたブラジルCD制作であった。最初の2回のコンサートに間に合わず、3回目のコンサートからの販売となったが、1000枚制作したCDは、販売予想枚数以上の約750枚を販売することが出来た。主がさらに、このCDをブラジル伝道のために用いてくださることを期待している。



CD制作に関しては、サントアンドレの鈴木マキ先生が責任を負ってくださった。せっかくブラジルで制作するのだからと、自らジャケットの歌詞と解説文をポルトガル語訳に訳してくださった。ブラジルに点在する5つの著作権協会に何度も連絡を入れて、どの曲がどこの著作権協会に登録されているのか問い合わせ、手続きをしてくださった。その前に、様々な仲立ち機関が存

在するブラジルでは、この5つの著作権協会の所在を知るまでに、一苦労した。大変な作業だったことと思う。その後、ジャケットの印刷で、歌詞や訳のページがずれたり、許諾番号の間違いなどが重なって、完成が遅れに遅れたため、マキ先生が何度もCD会社に足を運んで掛け合った末、やっと3回目のコンサートの2時間前に製品が完成した。鈴木先生の労苦に、心からの感謝と敬意を表します。

(写真:ブラジル制作CD「神だけが」)

主に感謝！

アリアンサのコンサート以来、「主よ、お語りください」と祈るたびに、イザヤ書41章10節のみことばがいつも心に響きました。

「恐れるな。わたしはあなたとともにいる。たじろぐな。わたしがあなたの神だから。わたしはあなたを強め、あなたを助け、私の義の右手で、あなたを守る。」

今回ほど、常にインマヌエルの神の臨在に触れ、主の義の右手が共にあることを感じながら、賛美、証しさせていただいた時はなかったと思います。また、自分の思いや人の意見に従う前に、まず主のみこころを伺いながら、祈りとともにコンサートを進めることが出来たこと、何よりもそのように導いてくださった主に、心からの感謝を捧げます！

お祈りください！

10月から、台湾、日本での賛美伝道コンサートが始まります。主との交わりが益々深められ、小さな行いに至るまで主のみこころを求めながら、主の栄光をほめたたえ、キリストの贖いを宣べ伝える者とさせていただきたいと、心から祈り願っているところです。どうぞお祈りお支えください！